

O.H.P. NEWS

Vol.65 No.10

2023 OCT. 10

昭和42年1月20日第3種郵便物認可
令和5年10月15日発行（毎月15日発行）
通巻728号 ISSN0288-867X



728

病棟活動報告(109)-3

大阪医科薬科大学病院における活動報告(3) ～病棟薬剤業務(薬剤師へのタスク・シフティング)、 PFM(Patient Flow Management)業務～

大阪医科薬科大学病院 松本 裕喜, 宮原 美季, 西原 雅美

1) タスク・シフティング

従来、当院では「薬あるところに薬剤師あり」をモットーに、ICUなどの重症系を含む全科全病棟、さらには手術室や化学療法センターなど様々な部署に薬剤師を配置して薬剤業務を担い、チーム医療の要として医薬品適正使用を推進しています。

近年、働き方改革が注目される中で、業務効率の向上や医師の業務負担軽減策として、タスク・シフティングが重要なポイントとなっています。医政局長通知においても(図1)、薬剤師へのタスク・シフト/シェアが可能な業務が具体的に示されており、薬剤師に大きな期待が寄せられています。当院でもこの方針に基づき、薬剤師が積極的にタスク・シフティングに取り組んでおり、業務改善推進活動の一環として、また医療安全の観点からも評価を受けています。その中から、本章では病棟薬剤業務に関わる内容を主に紹介します。

●医師から薬剤師へ タスク・シフト/シェアが可能な業務

- ① 周術期における薬学的管理等
- ② 病棟等における薬学的管理等
- ③ 事前に取り決めたプロトコールに沿って行う処方された薬剤の投与量の変更等
- ④ 薬物療法に関する説明等
- ⑤ 医師への処方提案等の処方支援
- ⑥ 糖尿病患者等における自己注射や自己血糖測定等の実技指導

令和3年9月30日 医政発0930第16号医政局長通知 より抜粋

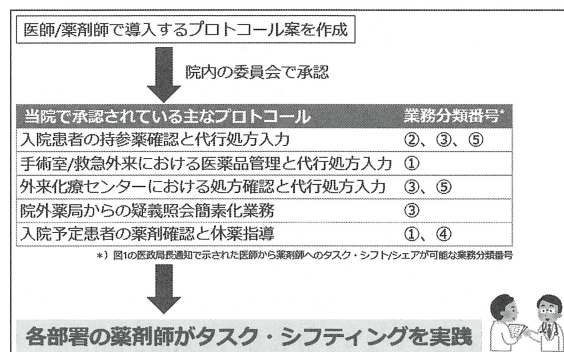
(図1)

○プロトコールに基づく薬物治療管理

(PBPM: Protocol Based Pharmacotherapy Management)

タスク・シフティングの実践にあたってはPBPMを策定することから始まります。このPBPMは各病

棟・部署の医師と薬剤師とでタスク・シフティングする内容を協議し、最終的に院内の委員会の承認を経て、実践しています(図2)。ここからはPBPMに基づくタスク・シフティングの主な実践例を紹介いたします。



(図2 PBPM 策定の流れ)

○入院患者の持参薬確認と代行処方入力；処方提案から処方支援へ

これまで、病棟薬剤業務の主な業務の一つとして薬剤師が持参薬を確認、報告オーダ(処方提案)を行い、その内容に基づき医師が持参薬の継続処方を行っていましたが、昨年度より、一部病棟で薬剤師による代行処方入力(処方支援)を開始しました。最初に導入した消化器内科病棟(43床)では、現在、薬剤師が持参薬報告から継続処方までを実施し(院内採用薬への切替えを含む)、2023年4月時点で持参薬継続処方の約80%を薬剤師が担っています。薬剤師は持参薬を報告するだけでなく、薬物治療における持参薬内容の評価、入院後に開始される薬剤との相互作用、腎機能など患者の生理学的特性などを考慮し、持参薬の継続処方を行っています。その結果、タスク・シフト導入後は薬剤総合評価調整加算件数が増加傾向となり、持参薬の院内採用薬への切替え時の修正率が著明に低下

するなど、タスク・シフト導入による効果がみられています。さらに、薬剤師が持参薬確認から処方まで一連の流れで実施することで、業務効率化はもちろん、個々の患者に適した薬物治療の提供と処方ミス防止に繋がるなど医療安全の観点からも有用であると評価され、昨年度、院内で実施された“医療安全月間”の取組みの中で病院長賞を受賞しました。

○手術室/救急外来における医薬品管理と代行処方入力

手術室（OP）や救急外来（ER）担当の薬剤師は、定数で配置される薬剤の選定に加えて、消費薬剤と手術麻酔記録や3次救急記録と照合確認した後、使用数量や投与手技の代行処方入力も行っています。薬剤師が消費薬剤の確認から代行処方入力まで行うことで、OPやERの不良在庫の見直しや医事請求漏れ防止、使用した薬剤の処方モニタが可能となり、医薬品適正使用に繋がると考えています。

○外来化療センターにおける処方確認と代行処方入力

前号でご紹介しましたが、外来化療センターには複数のがん専門薬剤師が常駐し、患者指導をはじめ、がん化学療法全般の管理を行っています。適切な休薬期間確保のための投与日変更や副作用回避のための点滴時間変更などの代行処方入力も行っており、修正必要な処方のうち約30%（26.1件/85.1件、月平均）を薬剤師が代行しています。がん専門薬剤師が副作用マネジメントから処方まで行うことで、副作用の未然防止、適切かつ迅速な対応が可能となり、がん化学療法における医薬品適正使用の推進に繋がると考えています。

本章では、薬剤師によるタスク・シフティングの取り組みを紹介しました。年々拡大する薬剤師の業務ですが、薬の専門家・責任者として安全で良質な医療を提供できるよう、システムやAIの導入も含め日々能動的に取り組んでいます。

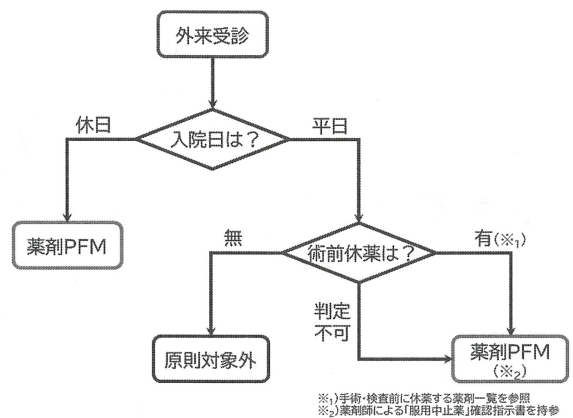
次の章では、PFM（Patient Flow Management）業務について紹介します。

2) PFM（Patient Flow Management）

当院では、入院前から「患者の入院生活、さらに退院後の生活」を見据え、外来時に多職種で先行的介入・情報収集することで、入院医療の安全性と質の向上、また円滑な在宅ケアへの移行を支援する取り組み

として、PFM（Patient Flow Management）を行っています。

その中で、薬剤部では『休日入院、もしくは術前休薬の患者』を対象として薬剤PFMを実施しています（図3）。休日入院の患者を対象としている理由は、休日は薬剤師における持参薬鑑別・報告の対応が困難であることから、事前に薬剤PFMを行うことで医師や看護師と共有し、入院治療を円滑に進めることを目的としています。また、術前休薬の患者については、平均在院日数の短縮と術前休薬期間の兼ね合いにより、入院前より休薬が必要な薬剤が多数あることより、薬剤PFMを通じて事前に休薬を行うことで、手術に支障を来さないことを目的としています。








（図3 薬剤PFMの流れ）

術前休薬の有無は、一旦、外来診察室にて、手術日・検査日の確定と同時に、医師や看護師が患者の持参薬やその他薬剤情報（お薬手帳やお薬説明書など）と薬剤部が作成した『手術・検査前に休薬する薬剤一覧』（図4）を基に確認します。そこで、術前休薬が必要な薬剤の判断ができない場合、医師は薬剤PFMの予約を行います。また、外来にて術前休薬の説明を行ったものの患者の理解が乏しい等、薬剤師による術前休薬の確認・指導が必要と考えられる場合には、『薬剤師による「服用中止薬」確認指示書』を発行し、併せて薬剤PFMの予約を行います。


薬剤PFMでは、常用薬、一般用医薬品や健康食品・サプリメントの服用状況、またそれらの服用に伴う副作用やアレルギーなどを踏まえて評価します。さらに必要に応じて、かかりつけ薬局やかかりつけ医などから情報収集し、あらゆる薬剤情報を総合的に評価します。術前休薬の場合も同様に患者の理解度を評価し、必要に応じてかかりつけ薬局に連絡する等、患者

手術・検査前に休薬を要する薬剤(内服薬)一覧(2023年4月現在)

①抗凝薬

一般名	当院採用医薬品					※院外採用医薬品 (一般名・当院採用の医薬品名同一の場合は省略)
	商品名(規格簡)	写真	血小板との反応	必要な休薬期間	再開の目安	
アピキサiban	エリキュース錠 (ブリストル・マイヤーズスティブ)		—	—	—	—
エドキサバンチル酸塩水和物	リクシアナOD錠 (第一三共)		—	・低 出血リスク 腎機能に依らず:12時間以上 ・中 出血リスク Cer ≧30mg/分 :24時間以上 Cer 15~29mg/分 :36時間以上 ・高 出血リスク 腎機能に依らず:48時間以上	・低、中 出血リスク 術後6~8時間以降 ・高 出血リスク 可能な限り早期 (出血懸念時: 48~72時間以降)	—
リバーロキサiban	イグザレルトOD錠 (バイエル薬品)		—	—	—	—
ダビガランエテキシラート メタンスルホン酸塩	ブラザキサカプセル (日本ベーリンガーインゲルハイム)		—	・低 出血リスク 腎機能に依らず:12時間以上 ・中 出血リスク Cer ≧ 40mg/分 :24時間以上 Cer 30~39mg/分 :36時間以上 Cer 30~45mg/分 :48時間以上 ・高 出血リスク Cer ≧ 50mg/分 :48時間以上 Cer 50~79mg/分 :72時間以上 Cer 30~45mg/分 :84時間以上	・低、中 出血リスク 術後6~8時間以降 ・高 出血リスク 可能な限り早期 (出血懸念時: 48~72時間以降)	—
ワルファリンカリウム	ワーファリン錠 (エーザイ)		—	3~5日	術日夕方もしくは 術翌朝から 維持量で再開	—

②抗血小板薬

一般名	当院採用医薬品					※院外採用医薬品 (一般名・当院採用の医薬品名同一の場合は省略)
	商品名(規格簡)	写真	血小板との反応	必要な休薬期間	再開の目安	
アスピリン	アスピリン (吉田製薬)		—	—	—	アスファノート配合錠 イスギア配合錠 ニトギス配合錠 パッサミン配合錠

(図4 手術・検査前に休薬する薬剤一覧)

個々に見合った対応を行っています。

薬剤PFMで得た情報は、電子カルテ内に持参薬報告を行い、院内採用の有無(採用無の場合は代替薬の提案)や服用状況、副作用・アレルギー情報等も含めて医師・看護師・入院予定の病棟薬剤師等にフィードバックし、入院時の治療に活用する運用になっています。

【おわりに】

2025年に竣工が予定されている新本館B棟では、患者サポートエリアの充実など病院のフロントラインが大きく様変わりする計画になっており、今回ご紹介したPFM(Patient Flow Management)については、現

在進行形で業務フローの見直し、整備が進んでいます。

多職種で様々なトライアルを実施しており、薬剤部では入院前の薬剤確認に関する薬薬連携(入院前服薬情報提供依頼書〔病院⇄薬局〕の運用など)を進めているところです。医療DXの進展に沿った患者情報の電子的な共有など、Super Smart Hospitalの実現に向けてアイデアを持ち寄り、より充実した医療の提供を目指しています。

我々薬剤師の活動は止まるところ知らず、「チーム医療のキーパーソンとして、気付き、行動できる薬剤師」をキャッチフレーズに、薬剤師の能力を存分に発揮していきたいと考えています。

O.H.P. ホームページ更新だより

2023年10月現在

- イベント情報 更新
- 研修会情報 更新
- O.H.P. 会員施設の求人情報 更新

なお、詳細はホームページをご覧ください。 ホームページ：<https://www.ohp.or.jp/>
ユーザー名：ohp23 パスワード：m23 (4月1日より変更になりました)